

生命とは何か

そもそも私たちの生命とはどういうものなのかと考えたときに、生き継がれてきた「いのち」ということを感じます。たった一個の受精卵が、やがて一人の人間となっていく「いのち」を宿しているのですが、それは、父母の「いのち」の結合体なのです。それを^{さかのぼ}遡っていくと、やがて全ての生命の元ともいえる「いのち」にたどり着くことができると思います。

その「いのち」は物質というより「はたらき」であると言えます。その働きによって生み出された生命が、やがて「私」という意識によって生きられるようになります。私の意識の良し悪しの判断を超えた生命体、つまり「身」としての私は、自らの寿命を精一杯生きようとしているのです。

意識としての「私」は、「他」から区別する符号に過ぎないのに、自分を実体化し、死を恐れ、より豊かで便利に快適にと、死を遠ざけるような生き方を志向しますが、身としての私は、どのようなご縁に遭っても、力なくして終わるその時まで生きよう生きようとするのであり、危険を避ける本能は、死を恐れるということではなく、生き抜いていくための本能なのでしょう。

この身は一体何故、この世界に誕生することができるのでしょうか。中国唐代の善導は、次のように言います。

若し父無くは能生の因即ち闕け、若し母無くは所生の縁即ち乖きなむ。若し二人俱に無くは即ち託生の地を失はむ。要^{かなら}ず須^{すべから}く父母の縁具して、方に受身の処有るべし。既に身を受けむと欲するに、自らの業識^{ごつしき}を以て内因と為し、父母の精血を以て外縁と為して、因縁和合するが故に此の身有り。

仏教は、輪廻の主体を精神作用（業識）と考えています。人と生まれたことを実体化し、元の「いのち」との繋がりに気付かないまま、生に執着し続けているこの精神作用が、今の我が身が誕生する原因だと言うのでしょうか。親の勝手

で生まれたのではなく、生まれることを欲した自分があったということです。

この精神作用が持っている基本的性質を「無明」と呼び、そこから様々な煩惱が出現するのです。ですから、人は人で有る限り、誰一人として煩惱がない人はいないのです。しかも煩惱は、その人が出会ったご縁でいくらでも出てきますので、その数は無量なのです。

業識を因としてこの世界に生命として形を現す「いのち」の大本を「阿弥陀」とすると、無明に覆われたその身の偽りのない姿を煩惱具足の凡夫と受け止め、「私という意識」への囚われを慚愧し、身の全体をあげて「阿弥陀」に帰命するということの表現が、「南無阿弥陀仏」という念仏の持っている意味の一つではないでしょうか。それ故、念仏することで、逆に凡夫の身を生きる私が照らされていく道程となるのが念仏の信心の具体的姿だと思うのです。

意識としての私がどのような生き方を手に入れようとも、生命の終わりに臨んだ時に、意識としての私と、その私に執着された身は共に無に帰すのですから、何もなかったことと変わりがありません。しかし、生命は「はたらき」の世界に消えていく（変化する〈化生と表現する〉）のですから、無に帰すとは言えないのです。

親鸞聖人は、信心の業識にあらずは、光明土に到ることなし、と言います。如来回向の信心とは、私という意識よりもっと深いところから、私の意識の上に現れてくるものだということでしょう。